

「黒いスーツを着た男」★★★★★

2013（平成25）年7月24日鑑賞＜GAGA試写室＞

監督・脚本：カトリーヌ・コルシニ
アル（アラン）（社長令嬢との結婚を控えた男性、自動車修理工）／ラファエル・ベルソナ
ジュリエット（轢き逃げ事件の目撃者）／クロチルド・エム
ヴェラ（被害者の妻、不法滞在のモルドヴァ人）／アルタ・ドロシ
フランク（アルの友人、自動車修理工）／レダ・カテブ
マルタン（自動車ディーラーの社長）／アルバン・オマール
マリオン（マルタンの一人娘、アルの婚約者）／アデル・ハネル
テスター／ジャン＝ピエール・マロ
フレデリック／ローラン・カベリュート
アドリアン／ラシャ・ブコヴィッチ
2012年・フランス、モルドヴァ映画・101分
配給／セテラ・インターナショナル

＜まずは、スーツの着こなしが、アラン・ドロンの再来！＞

高温多湿の日本の夏には、フランス、イタリア、イギリスを中心とするヨーロッパの紳士服（スーツ）は似つかわしくなく、半袖開襟シャツや沖縄のかりゆしウェアなどの方がよほど適している。また、スーツにネクタイ姿は背が高く手足が長い西欧人にはいかにも紳士の服装らしくピッタリ決まっても、背が低く手足とくに足の短いズングリ・ムックリ型の古い日本人にはあまり似合わない。私はかつて高級紳士服店でイタリアの高級紳士服アルマーニを試着したことがあるが、これを着るとズボンの大幅な裾上げはもちろん、上衣の袖も大幅に詰めなければ着たものではなかった。そして、無理やりそんな風に「補正」してしまうと、せっかくのアルマーニのデザイナーが意図した美しいライン、シルエットが台無しになってしまうから、全く無意味！

思い起こせば、アラン・ドロンを起用したターバンの約40年前の有名なTVコマーシャルに「D'urban, c'est l'elegance de l'homme moderne.」というおまじないのようなセリフがあったが、これは「ターバン、それは現代を生きる男のエlegance」という意味だったらいい。高度経済成長時代の日本のサラリーマンはクソ暑い日本の夏でも背広を「戦闘服」として愛用していたが、私を含めた多くの団塊世代の男たちのスーツ姿はダサかったはず。そんな時代状況下、顔形の美しさだけではなく、スタイル抜群のアラン・ドロンが洗練されたスーツをカッコよく着こなしてTV画面に登場すれば、それが注目を集めたのは当然だ。もっとも、団塊世代の男たちがいくらターバンのスーツを買って着用しても、所詮アラン・ドロンのようにはなれないが、それでもあのコマーシャルがあれば有名になったのは日本の男たちに、うたかたの夢を与えてくれたためであることはまちがいない。1981年生まれのフランスの新星ラファエル・ベルソナはアラン・ドロンの再来！と絶賛されているそうだが、印象的な邦題からわかるとおり、まずは、そのダークスーツの着こなしがアラン・ドロンの再来！

＜危険な香りも、アラン・ドロンの再来！＞

アラン・ドロンは美形でカッコいいだけに『黒いチューリップ』（63年）のような陽気な主人公も似合っていたが、何といてもその代表作はルネ・クレマン監督の『太陽がいっぱい』（60年）。そこでは、外見の美しさとは裏腹の、悪や心の内に秘めた危険な香りが何ともいえない魅力だった。つまり人間は、とりわけ女は、優しいだけの男より、こんな危険な香りを持ったハンサムな男が好きになるわけだ。しかし、ラファエル・ベルソナが演ずる本作の主人公アルはマルタン（アルバン・オマール）が経営している自動車ディーラーの修理工ながら、今は10日後に社長の一人娘マリオン（アデル・ハネル）との「玉の輿」結婚を控えていた。そうなのはもちろんアルの努力もあっただろうが、ホントは黒いスーツがよく似合う彼のハンサムさのおかげ？

本作冒頭は10日後の結婚式を控えたアルが同僚の自動車修理工のフランク（レダ・カテブ）たちと酒を飲み、車を乗り回して遊びまわるとシークエンスが描かれる。それを見ていると、『太陽がいっぱい』でアラン・ドロンが演じた貧しい青年トムと同じように、上昇志向を持った男アルがはっきりした目的意識を持って社長令嬢に近付き、自分の（男性的）魅力をみせつけることによって「玉の輿」結婚を成功させた満足感、達成感がブブン匂ってくる。つまりラファエル・ベルソナ演ずるアルが持つ危険な香りも40年前のアラン・ドロンと同じだから、その点でも彼はアラン・ドロンの再来！しかし、飲酒運転は絶対にダメ。2人の同僚を乗せて飲酒のままハンドルを握ったアルは夜道で一人の男を撥ねてしまったから、さあ大変。車を停めて外に出たものの、倒れている男を見て茫然自失状態になっているアルに対してフランクは「早く車を出せ！」と叫んだが、さてこんな場合アルはどうすべきなの？ そんなことは誰でもわかっているはずだが・・・

＜飲酒、暴走運転、轢き逃げの罪の重さは？＞

去る6月5日に亡くなった塩屋俊監督の『0（ゼロ）からの風』（07年）は、愛する一人息子を飲酒、暴走運転によって死亡させられた母親が刑法を改正させ、危険運転致死傷罪を新設させる闘いを描いた（『シネマールム15』214頁参照）が、危険運転致死傷罪の新設から約10年、日本の飲酒運転に対する厳罰化の流れは定着した。その結果、今や飲酒危険運転のうえ轢き逃げの罪ともなれば、懲役20～30年は免れないはずだ。

飲酒、暴走運転、轢き逃げの交通事故を扱う刑事ドラマの場合は、現場に残された犯人のものと思われる車の塗料から犯人を割り出す苦勞が描かれることが多い。しかし、本作を監督した女性監督カトリーヌ・コルシニが自ら書いた脚本のポイントも、たまたまこの事故をアパートマンのバルコニーで目撃していた女性ジュリエット（クロチルド・エム）の存在。さらに突っ込めば、さらなるポイントは、ジュリエットは犯人の顔や車のナンバーは覚えていなかったものの、この事故の犯人は運転席から降り茫然自失状態で立っていたダークスーツの（若い）（カッコいい）男ということだけはハッキリ覚えていたことだ。

たまたまこの轢き逃げ事故を目撃したジュリエットが、わざわざ現場まで駆けつけて一緒に生活していた恋人に救急車を呼ばせたり、警察の事情聴取に積極的に協力したのは、ある意味当然。しかし、「立派」とは言いながら、ある意味で「おせっかい」なのは、ジュリエットがその翌日被害者が収容されている病院を訪れたこと。これによってジュリエットは昏睡状態にある被害者の妻ヴェラ（アルタ・ドロシ）と出会い、ヴェラとその夫が貧困に喘ぐモルドヴァからの移民で不法就労者であることを知ることになったわけだが、さてそれ以上にこの事件に関して彼女は一体何をしようとするの・・・？

＜目撃者の意外な行動に注目！物語は意外な展開に？＞

アルは社長令嬢マリオンとの結婚を控え幸せの絶頂期だったが、自らの運転で引き起こした交通事故によって大きな人生の岐路に立たされることになったのは仕方ない。とっさにフランクの進言どおり轢き逃げの現場から逃走し証拠隠滅工作に走ったものの、アルの良心の呵責は相当なものらしい。刑事ドラマではよく「犯人は必ずもう一度犯行現場に戻ってくる」という鉄則が語られるが、アルもそうらしい。新聞で目撃者がいることを知って更に動揺したアルは、被害者の容態を確かめるために病院へ行き、昏睡状態の男を見て愕然。そして、こんな行動をとる黒いスーツを着た男の背中をジュリエットが見た時、ジュリエットにはこの男があつた時に車から降りて立っていた（ハンサムな）男、と直感したところから、本作の意外なストーリーが展開していくことになる。

こんな場合、ジュリエットは直ちに警察に通報すべきことは明らかだが、この黒いスーツの男が犯人だと直感しながらジュリエットは警察への通報はおろか、ヴェラにもそれを話さず、なぜか一人アルの居所を突き止めに行く行動に・・・。ジュリエットは医師志望の女性で恋人と同居していたが、こんな風にこのハンサムな黒いスーツを着た轢き逃げ犯に興味を示してしまった（？）ところを見ると、ひょっとして今の恋人に、そして今の生活に何らかの不満が・・・？

＜被害者の妻の立場は？願いは？加害者との接点は？＞

20年ほど前の日本では、中国人留学生が交通事故で死亡しても、将来の得べかりし利益すなわち逸失利益を中国の人民元で計算し、それを日本円に換算すれば、きわめて安いものだった。多分、彼もそれと同じ、いや彼はモルドヴァからフランスに流入してきた不法就労者だから、彼の損害賠償金はそれ以上に厳しい額になるはずだ。もっとも、妻のヴェラにしてみれば、賠償金がいくらかという問題以上に、犯人が轢き逃げ、逃走していること自体が許せず、そのため怒りに震えていたが、それは当然。そんなヴェラに対して、事故を偶然目撃したにすぎないジュリエットは何かと優しく接したから、ヴェラはジュリエットに対して感謝いきりだが、なぜかジュリエットはヴェラに対して真犯人を発見したことを教えない。しかし、それはヴェラに対する裏切りなのでは？

他方、ヴェラに何も話さないままアルの居所を突き止めたジュリエットは、アルが良心の呵責に苦しんでいるサマを見て、いたく同情・・・？そして、被害者やヴェラたちの苦悩をジュリエットから聞いたアルが、被害者（の遺族）に渡すお金を準備している姿を見ると、ジュリエットは積極的に（？）その仲介役を買って出たが、それは一体なぜ？さらにカトリーヌ・コルシニ監督がスクリーン上に登場させる驚くべきシーンは、雨の中でお金を渡すために車の中に入ったジュリエットとアルとの間でくり広げられる激しいカーセックスだ。これは一体どういうこと？ さすが、フランス映画は面白い。そして、カトリーヌ・コルシニ監督が見せる人間の洞察力はすごい。もっとも、せっかくジュリエットを仲介役として交通事故の被害者と加害者の間に接点ができていたのに、これではすべてがぶち壊しになってしまうのでは・・・。

＜花嫁の父親は？花嫁は？＞

アルの花嫁になるマリオンの父親マルタンは「自動車ディーラー」のオーナーだが、裏金づくりに精を出している様子を見ると、その根性はしがない企業のおっさんレベル・・・？また、一人娘を釣り合いのとれたレベルの会社の御曹司に嫁がせるのではなく、比較的的努力家と思われる自社内の自動車修理工に嫁がせるのもどちらかという内向きだから、それほど大した会社ではなさそう。そんな父親だから、一人娘の花嫁になるアルを会社の幹部に抜擢し個室まで与えて業務に励むべき環境を与えているのに、「あの日以来」何となく様子がおかしいアルに対しておかんむり。そこでフランクたちにアルの様子を監視させてみると、アルは会社の車を一台勝手に売却してその現金をどこかに使っていることが判明したうえ、今度は裏金としてため込んでいる裏金庫を勝手に開けて現金を引き出そうとしていたから、マルタンが烈火の如く怒ったのは当然だ。

他方、娘のマリオンの方は「逆玉」で結婚することになったアルが自分に尽くしてくれるはずと思っていたのに、「あの日」以来何かと秘密的行動が多いことにイライラ。この原因は、ひょっとして女・・・？ そう考えたのは仕方ないが、アルにいくら追及してもアルは口を閉ざしたまま。これでは10日後の結婚式が思いやられるが、ある日遂にアルから真相を聞かされ、アルが自首するかもしれないと知ると・・・？ こんな場合、「どうせこの男はカネと地位目当てで私と結婚しようとしただけ」と考え、いくらハンサムな男であっても切り捨ててしまうのが社長令嬢としては普通だろうが、アルがハンサムなだけではなく誠実な人柄だと知ったマリオンの対応は・・・？ ころあたりカトリーヌ・コルシニ監督の描き方はさすがと思わせるものがあるので、じっくりと味わいたい。

＜臓器提供をめぐる問題提起をどう受け止める？＞

日本でも臓器提供とその移植問題はいろいろと難しいが、本作では交通事故被害者の妻ヴェラの「要求」を満足させるべく会社の裏金にまで手を出して2万ユーロという大金を準備したのに、被害者が死んでしまうという事態の中で、三者の関係は新たな展開を見せていく。カトリーヌ・コルシニ監督がその本筋のクライマックスに向かうまでの1つのエピソードとして示すが、フランスにおける臓器提供問題だ。

被害者の治療にあたっていた医師団は、そのたった一人の遺族となった妻のヴェラに対して死者の臓器提供を願い出たが、それに対してヴェラが言い放ったのは、「いくら払ってくれるの？」というセリフだ。死者の臓器を有料で売買することなど医師にできるはずはないから、医師団はこれを明確に拒絶したが、それに対して泣きながら「心臓なら〇〇ユーロ、眼なら〇〇ユーロ、肝臓なら〇〇ユーロ」と叫び続けるヴェラの姿は痛ましい。また、社長のマルタンと大喧嘩してまでアルがかき集めた2万ユーロを、ヴェラが棺に入れる亡き夫に着せる上質のスーツや自分の葬儀用の礼服を購入するため惜しげもなく使う姿を見ていると、かなりエキセントリックだと思う反面、不法移民として虐げられて生きてきた挙げ句、死んでもこんな扱いしかされないことに対するヴェラの怒りがひしひしと伝わってくる。本作に見る、この臓器提供のエピソードについては、ベストの解決策はこれ、というものを示すことはできないが、こういう問題があるということだけはしっかり認識する必要がある。

＜クライマックスに見る三者関係+新妻の新たな展開は？＞

本作は、サスペンスドラマのような劇的なクライマックスが待ち受けているわけではない。あの起きた交通事故をめぐって、本来出会うはずのない①加害者のアル、②事故を偶然目撃したジュリエット、③悲しみながらも犯人に憎しみを燃やし続ける被害者の妻ヴェラ、という三者の人間関係がいかにも絡み合い、いかなる結末を迎えるのかクライマックスとなる。そして、そのサブストーリーとなるのが、アルとマルタンの娘マリオンとの「玉の輿」結婚に向けてのストーリーだ。憔悴しきった姿でヴェラの前に姿を見せたアルに対してヴェラは悪態をついただけで終わったが、ヴェラの周りの男たちはアルに対して殴る蹴るの暴行を。それはアルにとってはある意味ありがたいこと？ なぜなら、それによってアルは罪の意識を少しでも免れることができるからだ。それをよくわかっているヴェラは、カネだけは受け取り、あくまでアルを無視しようとしたが、納棺を終え出棺の儀を行っている席に傷ついた顔でアルが一人登場するとヴェラは・・・？

他方、ジュリエットは今再び恋人との同居生活に入っていたが、アルとの車の中でのあの激しいセックスをどう総括？そして、2万ユーロという大金を準備したうえ出棺の儀にたった一人で出席しているアルをどのように評価？さらに、「今は父親も会社もどうでもいいの。ただあなたに側にいてほしいだけなの！」と泣き叫ぶ、結婚式を控えたマリオンとアルの関係は？ 突発的な交通事故から始まる三者関係+新妻との人間関係は結末に向けていかにも展開していくの？ そんなクライマックスにみる、三者関係+新妻の新たな展開に十分注目したい。そして、決してあなたは本作の主人公の真似をしないように・・・。